カーニヴァル

金石　稔

ニルヴァーナ、左肩口からはいって来る一月　水びたしの指、裸の光をはずして傾けた森　狩り取られた雪崩の話。ぼ、ぼくは布にくるまって潮をくぐり　右手の震えの中で　長い夜の廃墟が、と聴いたところから　遠く離れてみてわかるのだ、ねばっこい海と名付けたノートの下から息を殺し　百年と九日かけて戻って来たあたりから頭痛が始まり、同じ頃、朝日が体をすり抜けていったのを数回認めたのだった。

＊

（切れ切れの古文書の中の犯罪のような）風

＊

ぼくのほほに埋めこまれて朽ちたきみらの熱意のしるし　ぼ、ぼくは願う
腕のつけねに傷ついた　あいうえおのひとつさえも草の種とならずに
息の底まで落ちつづけて
形どられ　はじけ匂う声になるのを。

＊

ぬれさぶりる
おおさびぶらりさ
みずごみずなみうな
ぬれひとりとひとびに

そばにことみるちに
とばりおれもむめられ
すばみとととともり
かりひかりさぶいと
ひとこえこえにだす

*

近づくもの
二つの衣装をまとった湖、羽毛のリボンで束ねられた　交差点上の卵と鍵

一頁から失われている（これら）
カーニヴァルの水かさや夜のおくれ毛
こわばってくるのだな
まだ動かない心ひとつでは。

*

にののめ　とて
ひらり　らむ　むかめては
としひととし　と
かのちを　さ　さく
ひとめ　のみ

*

銀の瞳で　やつはおれをみつめていた　青空を大きなものから小さなものへと　積みあげてはくずしながら

何度目かの水蜜桃が拾い集められた場所へとはるかな旅の半ば

めもとにつらい影をおとしたものが　涙している瀬戸ぎわでの団らん

めくってみるよ息、一息で
数年もたてば　これがはじまりと知れる。

*

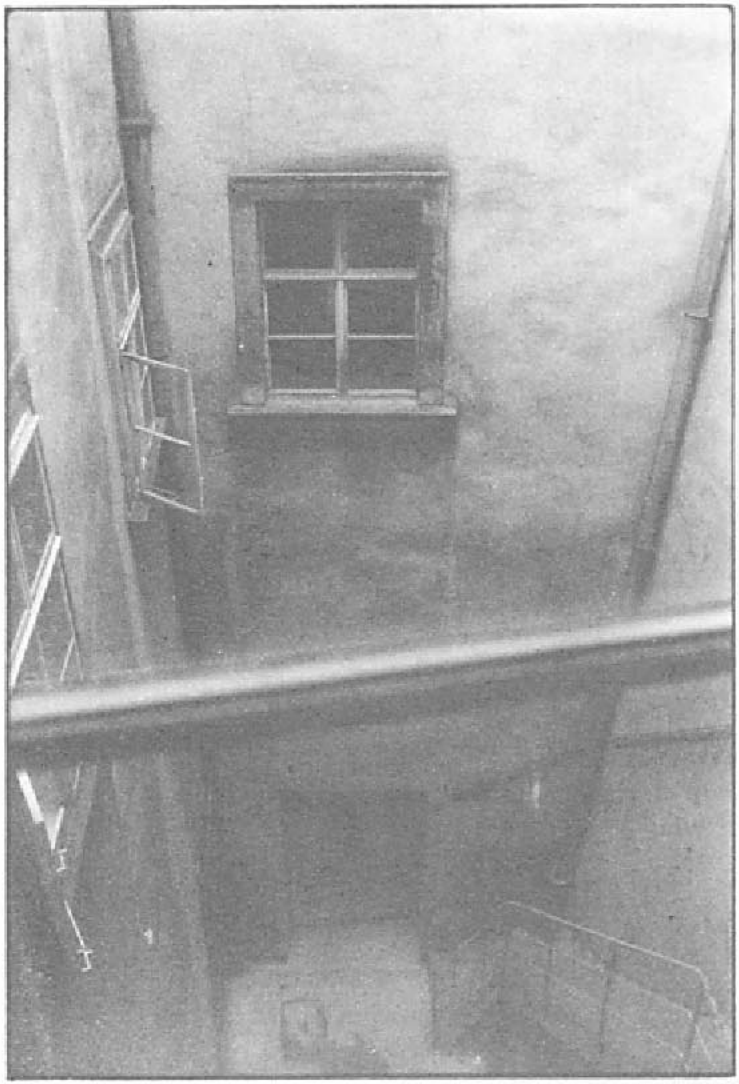
くださいぐぐくださいぐぐうと　きこえたところから遠く離れて想い出されるのだが、と書くなり眠り込める。（はずだ）

密林の夢のシャベットの夜の馬という名の歌手は疲れて都会の一隅で発声することはないだろう。
悲鳴が残る枕元に
走りつづけるのが夢だったのか
そのさなかに　光の通路のただなかに　わたしがいたカーニヴァル。
横顔でわかるのだ。

*

ニルヴァーナ、左肩口からはいって来る一月だったかしら　熱い雨、そぼ降る音の機密性は失われて　水びたしの指だってハナから闇なの。

痛いわここ、こころが砂ぼこり　と水ごりの数日前に戻る　眼覚めに息をとめる、と書き出すと。



ALBERTINA WIEN